

郷土館だより

Vol. IV No.2

1982. 1. 1



子供達のヤッサモチ (伊豆佐野 1月15日)

目次

新館長の挨拶	1
三島の龍爪さん	2・3
行事報告	4・5
収集資料紹介	6
展示品見学の手引・おしらせ	7

新館長のごあいさつ

特別展「明治の三島展」に想う

三島市郷土館長
梅田 貞治

10月1日付の人事異動で、郷土館長の命を受けました梅田です。どうぞよろしくお願ひします。

奇しくも、この就任日が、当郷土館の開館10周年にあたる日（46年10月1日開館日）でありまして、大変喜ばしい気持と同時に、責任の重大さを痛感しております。

開館10周年に際しまして、市民の皆様方の深いご理解、ご協力と、開館当初より事業運営におきまして、いろいろとご指導下さいました諸先生方のご尽力及び、前長谷川館長を中心とした職員の努力が、

—“文化のまち三島市”の郷土館が、市民の身近な施設として意識されるようになり、又入館者が100万人を突破した成果だと思われます。

この長年にわたり郷土館に貢献いただきました方々に対しまして、当紙面をもちまして、心より感謝申し上げます。

今後の郷土館事業運営につきましては、この開館10周年を1つの節といたしまして、

1. 郷土資料に関する専門的技術的な調査研究。
 2. 郷土の考古、歴史、芸術、民俗、産業、自然、科学等に関する資料の収集、保管及び展示。
 3. 入館者に対する説明、指導及び助言。
 4. 郷土資料に関する情報交換及び資料作成、刊行。
 5. 郷土資料に関する講演会、研究会等の開催。
- という、「三島市郷土館」として、果すべき、広く、かつ専門的な役割を、少数の限られた職員ではありますが、一致協力して頑張っていきたいと思ひます。

特に、当面の課題といたしましては、展示資料の保管、管理そして手狭となりました収蔵庫の資料整理、保存及び市民の皆さんより寄贈いただきました数多くの資料に対し、展示機能を充実させるために、2～3階の常設展示場の一部模様がえや、回転期間の早い特別展等を考へております。

どうぞ、「親しみのもてる楽しい郷土館づくり」のために、市民の皆様方の一層のご指導、ご協力を下さいますようお願い申し上げます。

●展示内容

開館10周年と市制40周年を記念して、特別展「明治の三島展」を10月1日より2ヵ月間、郷土館1階の特別展示会場で開催した。

展示は①明治の三島（商家）②郷土の人物③明治の学校④明治の風俗、の4つに大別展示した。

その内容は、①明治の商家では、商店の看板、パネル、双六等を、②郷土の人物では、コンデンスミルク発明者の花島兵右衛門、官立三島養の吉原守拙、三嶋大社宮司の矢田部盛治など、郷土の先覚者紹介、③明治の学校では、卒業証書や成績書、絵日記等を、④明治の風俗では、幻燈のガラス絵や日露戦争の号外、新聞等を展示した。

●好評を得た展示資料

300点余りの展示品数中、特に喜ばれたり、反響の多かった資料は—

現在東京に在住の方が、商店パネルと商店宣伝双六の写真の中に、当時両親が商売していた店が写っているため、ぜひその写真をゆずって欲しいと申込まれた。教育コーナーにおいては、村上さんの絵日記が、大変上手で日々の生活を、こと細かに書かれており、見学者の話題になっていた。

その他、当特別展の中心資料である商店等の看板では、「金鶏ミルク」「興奮ブランデー」「コムロビール」等が、表現が面白く、又大型看板で見えがかった。

●入館者状況

入館者は、2ヵ月で1万8千人を越し、市民や近在の人の反響が大きかった。

入館者層は、50才以上の男性がトップで、次いで、50～60才の女性が、娘や嫁、孫を連れて見学していく姿が目立った。新聞、ラジオ等の報道宣伝のおかげで、総体的には、明治期の三島を懐しく思う年齢層が主体で、若い人達は、年輩者より当時の様子を聞くという人が多かった。

●反省、検討点

展示場の構造、スペースの関係で、資料提供の一部に展示できないものがあつた。

展示案内では、各資料説明案内文が不足、展示資料に関連する当時の生活様式等の説明案内があれば、若い人達にもっと理解されたと思う。（特別展に先立ち、明治のシリーズ講座を実施したが）

展示期日について、お盆やお彼岸及び夏祭りの時期があたれば、三島へ帰省した人達に懐しく感じられたらろう。

三島の龍爪さん

地元の人々から「龍爪さん」と呼び習わされ、五穀豊穰・諸難除け・鉄砲安全の神を祀る龍爪信仰が、三島にも在る。箱根西麓の山沿いの村落、伊豆佐野、小沢、元山中にその龍爪さんがある。三島周辺の市町村では、長泉町元長窪と函南町桑原で見ており、その外に賀茂郡松崎町小杉原、伊東市、田方郡下にも在ることを聞いている。いずれの地域にも共通していることは、山村であり、龍爪の祀り場所は丘陵上であるという点である。山間地特有の信仰であるに違いない。

以下は昭和56年3月17日の龍爪さんの例祭日に、三島の3地区を見て回り、聞いたことから龍爪信仰について記してみようと思う。

小 沢

小沢の龍爪さんがいつ勧請されたかということは、小沢で共有している龍爪講文書箱の中の記録で判明した。記録には「嘉永貳年酉ノ三月十七日小沢元山中両字ニテ駿州江尻在龍爪穂積大神ノ本社ニ分靈ヲ請ヒ奉安置」とある。(注・嘉永貳年-1849) ここに記された龍爪山穂積大神の本社というのは、静岡平野北部にある通称龍爪山の東腹に鎮座する穂積神社のことで、静岡地方の龍爪信仰のメッカとして知られている所である。ここから小沢の村人が、嘉永二年という幕末の頃どうい理由で龍爪を勧請したかということについては、伝承もなく、史料からでは明らかではない。しかし別の文書中に、勧請当初には小沢・元山中の両村が共同で祀っていたものであるが、火災によって焼失したため、明治37年に社殿を再建した際、両村は別々に社殿を造り分祀したとあるので、この時に初期史料も焼けてしまったのかも知れない。

さて小沢の龍爪さんのお祭りは、昨年も3月17日に行なわれていた。現在は昔のようではなく簡素なお祭となったそうだが、それでもこの朝当番の家では龍爪社に出かけて掃除を行ない、後には地区公民館で村の男衆が集まってオフルマイを催すなどの形で続けられている。昔のお祭りについてオフルマイに参加していた人達から聞いた。

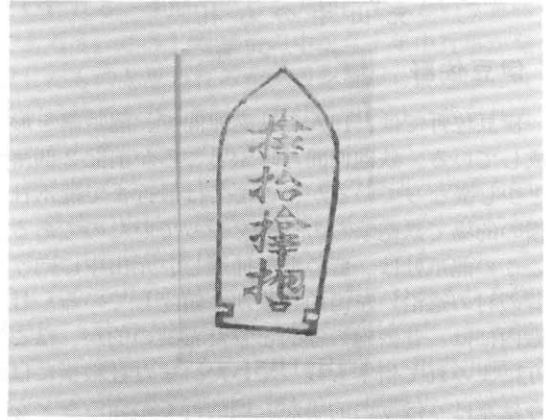
「昔は今よりずっと賑やかな祭りだった。青年達がおでん屋を開いたり、社殿の拝殿前では遠方よりお札を買い求めに来る参拝者のために札を刷って売ったり、子供たちにはアケビの葉に盛ったおむすびやおこわを配ったりもした。他所からは茶

碗などを持ちこんで売る商人も居た。参拝者の中には豊橋・浜松あたりの人もあった。特に賑わった時代は戦時中だった」

戦時中の龍爪さんは、出征する兵士の無事帰還を祈願する「武運長久」の玉除け神の性格が色濃かったようだ。小沢で「村からも兵隊に行ったが、みんな無事だった」という話しをよく聞いた。小沢のお札の1枚に、弾丸の形を彫ったものがあるが、兵士たちはこの札を胸に、無事帰還を祈りながら出征したものであろう。



武運長久祈願の奉納絵馬 (明治39年・小沢)



弾丸型のお札 (小沢)

元 山 中

元山中の龍爪社は、部落北側の尾根を山中新田の駒形諏訪神社に向う旧街道脇に、八幡宮、津島神社、山神社などといっしょに合祀されていた。

社内の木札には、小沢部落から分祀した時の講中7名が連記してある。

豆州田方郡錦田村元山中

講中 渡辺 演太郎

勝又 政 吉

高梨 清 吉
渡辺 音次郎
半田 常 蔵
勝又 五 造
高梨 平 吉

明治三拾七 旧 二月十三日

3月17日、元山中でも龍爪さんのお祭りが開かれていた。鉄砲床を今でも残している当番のお宅に村の男衆が集まり、夜から直会が始められた。やはりここでも戦時中は遠くから参拝者を集めたという。



元山中のお札

伊豆佐野

伊豆佐野では、19人の鉄砲仲間で、龍爪講を形成している。鉄砲仲間と呼ぶところが前記2部落と少し異なっているが、ここでは最近まで龍爪社横的場で鉄砲撃ちの行事をやっていたのである。この龍爪社は、藍の沢を通過し、元山中に向う昔の村の道沿い左側の丘陵地に鎮座している。社殿内には、昔鉄砲の標的とした布製の的が、ほこりにまみれて何本も残っていた。また社殿横には、今は草ぼうぼうの的場が、標的近くの窪みなどからそれと判るほどに形跡も残して在った。的までの距離はおよそ30間(約50M)ばかりである。案内して下さった古老によれば、この距離で撃つのが標準の的の時で、1寸(約3cm)角の的の時は、真中あたりから撃ったと言う。

祭りの直会は、講中がそれぞれ米5合づつを持ち寄り、当番の家では餅米を用意して行なわれる。伊豆佐野においても、現在祭りの中心はオフルマイだけとなってしまっていて、イロリで鉛と玉を焼いたり、大仁や沼津方面から参拝者があったことは昔語りになってしまった。龍爪社に残された数多

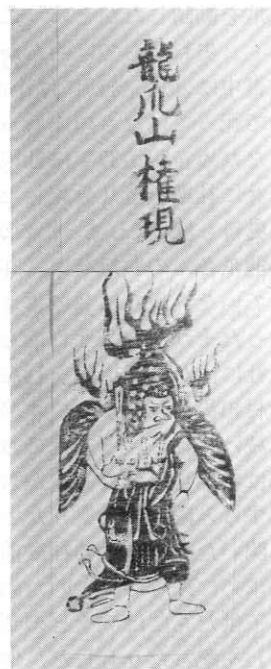
くの奉納織りだけが、かつての龍爪信仰を物語る資料となっている。

まとめ

以上見てきたように、3部落共に龍爪信仰の盛りは戦時中であつた。戦争も無くなった現在の平和日本では、武運長久・玉除けの祈願も無意味なものとなり、戦後衰退の一途をたどつたこの信仰の歴史もやむを得ないことと言えるだろう。しかし戦時の余りにも華やかに爆発的な流行を見たことにより、かつての、龍爪がこの地の勧請された頃の本来的な初期龍爪信仰を見落してはならないように思う。最初にも述べたように、現在では村の人達ですら初期の龍爪信仰については判らなくなっている。しかし、それぞれの地域に共通している山間の地という状況、「鉄砲神様」という表現等から推測するならば、そこには、昔鉄砲を所有し、山の猟を生活としていた人々の民俗が想起されはしないだろうか。かれらにとって、鉄砲とは即ち生活の糧を得るための道具であつて、後世の戦さのための道具ではなかつたのではないだろう。

龍爪神が、本来の山の神的な素朴な民俗神から離れ、明治維新後の日本歴史の潮流の中で、武運長久、玉除け、徴兵逃れの神としての役割を果たしてきた事実に、歴史の非情なる一断面を見る思いがする。

(杉村 齊)



伊豆佐野は50cmもある大型のお札である。

■行事報告■

館では、年間を通して多くの行事を行なっている。ひとつのテーマを絞って展示する企画展、昔から伝わる年中行事を体験して、学んでもらう体験講座、小・中学生を対象の少年教室等々である。これらは、いずれも郷土館と市民の皆さんの理解を深める懸橋であると思う。この橋も、人ひとりがやっと通れる小さな橋であったり、切れて落ちる寸前であったり、未完成で、遠い将来でなければ完成の目途が立たないものであったり、多種多様な問題をかかえた橋ではある。しかし、郷土館にとっても、市民の皆さまにとっても、けっして切ってはいけない橋である。そして、日常生活の通路としてますます利用価値を高めるべく、りっぱな橋にしていかなければならないと思う。そうした願いと、市民の皆様のご意見をお寄せいただきたく、行事の報告を致します。

シリーズ講座（明治の三島～交通編～）

三島は古代から、東西南北の交通の流れが交わる所であった。その為、大変に賑わいを見せた地である。ところが明治時代に入って、交通手段が以前とは異なる鉄道が入ってきた。明治22年、東海道線が開通したが、三島にはそのための駅が設置されず、町は火が消えたように寂しくなってしまった。時の流れに取り残されてしまったのである。これに気づいた三島町の有志は、以後この交通革命とも言える鉄道の重要性を認識して、東海道線三島駅の設置請願、豆相鉄道、駿豆電気鉄道の設立に動いた。

56年9月19日(土)に郷土館会議室において、一般市民を受講生として館職員が講師の任に当たった。

少年教室（体験学習会～縄文土器作り～）

館では、小学生・中学生を受講生として、年間を通して少年教室を開催している。竹の玩具作り、初午幟作り、夏の郷土学習会（植物採集）等であるが、縄文土器作りもそのひとつである。

日常の学校教育の範疇ではなかなか学べない性質のものも多く、逆にそれらが彼らには必要なものもある。社会教育の一環として、そうした部分の補完的役割を担うことができれば良いと考えている。特に郷土館では、郷土の特色を持ち、体験を通して学習できる講座の中から、少年の健全育成に寄与していきたい。

縄文土器作り講座は、ただ縄文土器をながめるだけでなく、自分の手で縄文土器を作ってみて、

古代の人々の知恵を探ってみるという趣旨のものである。

講座では①粘土の採集②混入物の選定③素地土の調査④ねりあげ⑤ねかせ⑥成形（形をつくる）⑦陰干し⑧研磨（みがき）⑨焼成（焼きあげ）の作業を4日間程行なった。56年11月1日(日)から12月6日(日)のほとんど毎日曜日であったが、参加した中学生達は日に日に熱が入って来て、最終日の野焼きでは、割れずに焼き上がった土器を見て、思わず歓声を上げた程であった。



完成した土器を手にする参加者

体験講座（おかざり作り）

日本人は四季の移り変わりを大事にする民族だといわれる。季節の節目を大切にするという意味であろう。こうした感情の中から、年中行事が発達したものと思われるが、残念ながら最近はこちらが見捨てられる傾向にあり、中には全然忘れ去られてしまったものもある。

郷土館ではこうした年中行事の復活と伝承を願い、講座の中にも数多く繰り込んでいる。次に紹介する（七草粥作り）もそのひとつであるが、この（おかざり作り）は、自分の手でおかざりを作るという昔の人達の気持を伝える目的で、毎年開いている講座である。12月14日(日)に、市内川原ヶ谷の芹沢貫一氏を講師に招いて、環飾り、三尺、宝船、荒神飾りを作った。

体験講座（七草粥作り）

忘れられようとする年中行事のひとつに、この七草粥作りがある。郷土館では、働く婦人の家の調理室を借りて、市内沢地にお住いの加藤ぶんさん（79才）と下里茂登子さん（73才）のおふたりに講師をお願いして、七草粥作りの実習講座を開催した。12月19日(土)という事で、正月行事のひとつとしては時期がすこし早かったが、七草（すすしろ、すすな、ほとけのぎ、はこべわ、せり、なずな、こぎょう。）も幸い全て揃える事ができた。

体験講座（草木染め—小鮎草こぶなくさで染める）

10月18日(日)に、郷土館を会場に開いた。18名の参加者はそれぞれに持ち寄った布を、小鮎草の染液に浸し、媒染液に浸し、見事に黄色或いはねずみ色の草木の色の発色に成功した。たとえ少しかりの色むらが出たとしても、その色が自分の手で、それも身近に生えている草木で出せたことに、参加者は大きな喜びを感じ得た。

この小さな体験から、祖先たちの知恵や祖先たちが発見し後世に伝えてきた色に対する感受性などを、少しでも理解していただけたなら幸いである。

以下は、今回の講座内容を作業の順序に従って記録したものである。

染め草の採集

小鮎草が身近にたくさん自生していることから、今回の染め草はこれと決めた。イネ科の1年草で、全国いたる所の田畔や原野に生えているが、余りにも平凡であり、草木染めに関心を持った人ででもなければ見向きかれない雑草である。茎はその下部が地上に傾いて這い、節々から根を出す。葉は互生し皮針状卵形、秋、枝の頂や上部の葉腋に花穂を付ける。こうした特徴があるので、採集の時花穂を目当てに探して回った。黄八丈で有名な八丈島では、この草を「八丈刈安」と称し、古くから染め草として使用していたと言われるが、今回、この変哲の無い野草から黄八丈の色が採れることを発見した祖先の知恵には、改めて驚かされたものだった。

染液を作る

採集してきた小鮎草を煎じて、染液を作る作業である。染める材料の量にもよるが、今回の講座のように何人もの人が持ち寄った多量の布を染めるためには、わずか一個の釜で染料を作っていたのでは間に合わない。そのため前日に煎じておいた染液よ使用したのであるが、本来は煎じ出した直後のものを使用した方が良いのである。小鮎草は2度煎じ、その煎汁を染液とした。



染液を作る前に井上先生を囲んで小鮎草についてのお話を聞く。

布の浸し染めと媒染

染める布は木綿の白生地とした。1人当りの布を1.5Mから2Mとしたのは、余り多量であっても染め難く、この程度の布ならば染色後にエプロンぐらいできるであろうと思ったからである。

あらかじめ糊落しをした布を染液中に入れ、タライの中で布を押し込むようにしていねいに浸す。ここで本来なら30分程度そのまま浸しておく方がよく染まる。次に媒染液の容器に布を移し、染液の時同様に浸す。ここで発色が促され、布全体にぱあっと色が広がる。今回の実習ではここまでの作業であったが、更に発色を強め、色を定着させるには、この後水洗し、中干しを行ない、もう一度染液に浸すことが必要である。媒染液にはみょうばんを溶かしたアルミナ媒染液と鉄を溶かした鉄媒染液の両方を用意し、参加者には好みの方を使用してもらった。アルミナ媒染で黄色に、鉄媒染でねずみ色に発色させることができた。



「さあ染めよう」ポリ容器の中の染液に布を浸す。容器は大きく、液は十分に欲しい。

■収集資料紹介■ (採集、寄贈による) (S56.7.1~10.31)

採集日	提供者	住所	資料	点数
56. 7. 18	荒井 えん氏	市内南田町2-10	幻燈用ガラス絵	104点
"	"	"	古絵はがき	16
" 7. 25	橋本源吾氏	市内一番町2-26	新聞(時事新報)	3
" 7. 30	花島信之氏	市内若松町4613	看板「金鶏ミルク」	1
"	"	"	"「株式会社三島銀行」	1
"	"	"	そのほか看板及び扁額	3
" 8. 7	村上保氏	市内東町12-7	明治教育資料図画	1
"	"	"	" 修業証書	7
"	"	"	" 卒業証書	1
"	"	"	" 賞状	4
"	"	"	" 学童必携	1
"	"	"	" 我子の教育	9
"	"	"	" 展覧会の絵	1
"	"	"	" 唱歌集	1
"	"	"	" 清書草紙	1
"	"	"	" 算術帳	2
"	近藤喜久雄氏	市内加茂川町	地券取調小前帳	1
"	"	"	地方税・協議費戸数割帳	1
"	"	"	祇園原開発関係文書	1
" 8. 31	イエズスの小さき姉妹会	裾野市桃園	韓国の杵	1
" 9. 10	小川光俊氏	市内中央町4-23	報知新聞(明治版)	1
"	"	"	早字引	1
"	"	"	御国分泰平御武鑑	1
"	"	"	烟火術	1
"	"	"	判取帳	1
"	"	"	明治のはがき	5
" 9. 13	鈴木清氏	市内大宮町2-14-4	傘作り用具	1
" 10. 3	神山一氏	市内沢地	万鏝(千枚原出土)	1
" 10. 6	山本とみ氏	賀茂郡松崎町西区	明治の卒業証書	1
"	"	"	女髪結免許外文書	2
" 10. 9	関野氏	市内幸原町	かご	1
"	"	"	陶製まくら	1
" 10. 16	河野昇氏	市内若松町4356	看板「宿屋営業ますや」	1
" 10. 22	中野藤吾氏	立川市栄町3-17	書籍「狩野川治水史料」	4
"	"	"	"「伊豆の海」	3
"	"	"	"「増訂豆州志稿」	16
"	"	"	そのほか郷土史の書籍	6
"	馬場益右エ門氏	市内青木3	駕籠昇営業鑑札	1
" 10. 30	中野藤吾氏	立川市栄町3-17	伊豆関係書籍	4



看板「金鶏ミルク」は、三島における乳製品工業の発達史を語る上で欠くことのできない象徴的資料と言えよう。金鶏ミルク(コンデンスミルク)の生みの親は、花島兵右衛門・撤吉父子であった。花島父子は、明治19年、牧畜を主とした農業を始め、牛乳販売所を開いた。しかし当時の牛乳消費量は案外少な

く、余剰牛乳の始末に困るほどであった。

そこで、撤吉は苦心研究を重ねた結果、とうとう煉乳の製造を成功させたのだった。

金鶏ミルク、金線ミルクの商標は全国にも知られるようになり、海外までもその販路を拡張するほどであった。

こうして、ここに端を発した三島の乳製品工業は、以後いく度かの変遷を経ながらも順調な発展を見ることになる。

資料紹介 (館蔵品)

■展示品見学の手引(三島の傘)

傘には、日傘、雨傘など、使用目的に応じた名のほか、製作方法や材質の違いによっても種々の呼び名がある。「三島傘」はいわゆる唐傘で、柄竹の先端につけたロクロに放射状に竹骨をはめこみ、これに和紙を貼り、柿渋や油を塗って防水のための加工を施したもので、竹、和紙、柿渋などその材質は実に日本の要素が強い。

「三島傘」は、交通のさかんな東海道筋であったことと、傘作りに必要な素材が近くで容易に調達できた事から盛んであった。

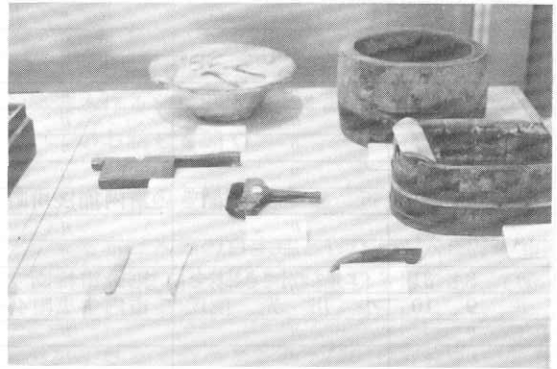
三島で傘づくりの職人が急増したのは幕末より明治初期にかけてのことで、武士の内職や転職で傘屋になった者も多かったらしい。三島でつくられた傘は(1)バンガサ(2)バンヤッコ(3)バンジャンメ(4)ホンジャンメ(5)ノダテ、それに子供が遊びに使う(6)オモチャガサの六種類があり、それぞれに男用と女用があった。

傘作りの作業工程は、およそ13工程であるが、

職人はこの工程を一人でおこなうのが普通である。

傘は熟練した職人でも一日平均三本を仕上げるのが精一杯の仕事であったという。したがって収入の多い家業というわけにはいかない。

現在市内には、広小路町の街道筋に面した磯井善太郎氏(明治39年生)が唯一軒の傘屋となっている。



和傘づくりの民具(郷土館2階展示場)

★★★★★★おしらせ★★★★★★

■郷土館の行事予定■

○57年1月31日(日) 「初午職作り」講習会

■編集後記■

昭和57年の新春を迎え、心よりお慶び申し上げます。

本年も「郷土館だより」元気に郷土関係の情報をお伝えするべく頑張りますのでよろしくお願い致します。

×、 ×

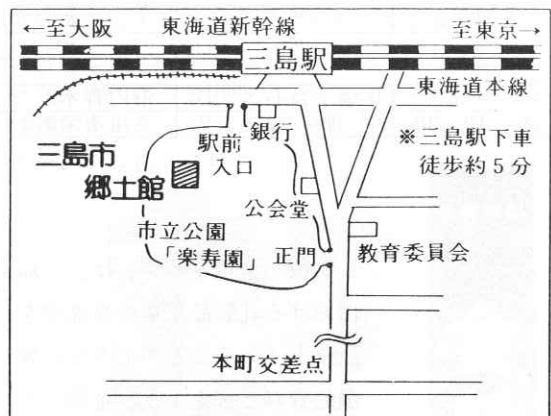
「郷土館だより」の発刊が種々の事情で一ヶ月遅れとなり、楽しみに待っていてくださる読者の皆様に迷惑をかけてしまった事、深くお詫び申し上げます。

郷土館には、毎日たくさんの観光客が訪れます。そんな中で、何回も足を運んで下さる人が多くあります。

この人達のように、郷土館が地元の皆様にとって身近な存在であることが、郷土館の役割のひとつだと思います。この「郷土館だより」が、郷土館と皆さんとを結ぶ懸け橋となり、この役割を果たす一手段となれば幸いです。(稲木)

利用案内

休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日
開館時間 午前9時～午後4時30分
入場無料 (但し、楽寿園入園の際、有料)



郷土館だより No.11

昭和57年1月1日発行

(年3回発行)

編集 三島市 郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
TEL 0559-71-8228
発行 三島市教育委員会